

## 高梁川を見下ろす古墳群で埋葬施設を発見！

みなみやま

南山城跡

みなみやまみょうじ

南山明地古墳群・南山明地遺跡

倉敷市

平成29年4月から実施している小田川合流点付替え事業に伴う発掘調査では、南山城跡西側の丘陵尾根上に築かれた3基の古墳（南山明地古墳群）と、南向きの斜面に広がる弥生時代中期の集落跡（南山明地遺跡）が見つかりました。

3基の古墳は全て円墳で、規模は調査区の最も西側に位置する2号墳が直径約10m、その東側に位置する3号墳が直径約9m、最も東側に位置する4号墳が直径約14mです。それぞれの古墳は周囲を溝（周溝）で囲われており、4号墳の溝からは土師器の破片がまとまって出土しました。

なかでも、4号墳では、墳丘中央付近で主軸をそれぞれ東西方向と南北方向に向けた墓坑（埋葬施設）が2基見つかりました。墓坑に納められた棺は残存していませんでしたが、埋土に残された痕跡から、いずれも箱形の木棺の可能性がります。どちらも、棺の底に直径5cm以下の丸い小石（円礫）が敷き詰められており、丁寧に埋葬を行っていたことがわかりました。このうち、南北方向に主軸を持つ墓坑では、3点の鉄器（ほこ 銚・かま 鎌・くわさき 鋤先）に加え、十数点の滑石製白玉が副葬されていました。4号墳の時期は、埋葬施設の特徴や出土遺物などから、古墳時代前期後半～中期前半と考えられます。（藤井翔平）



南山明地2～4号墳（東から）

平成27年10月から実施していた一般国道2号（玉島・笠岡道路）改築工事に伴う和田谷遺跡の発掘調査が昨年12月に終了しました。

これまでの成果をまとめると、縄文時代草創期（約12,000年前）から鎌倉時代（約800年前）に至るまで様々な時代の遺構や遺物が見つかり、この地で長期間、断続的に人々が生活していた様子が明らかになりました。

なかでも、良好に残っていたのが平安時代（約1,200年前）の集落跡です。丘陵西側の緩斜面を造成した平坦地で、

倉庫を含む、床面積30㎡程の大型掘立柱建物跡が建ち並んでいました。また、当時の貴重品である緑釉陶器の発見も注目されます。

和田谷遺跡の南側には、中世の有力者の居館跡と考えられる土居遺跡があり、その背後には中世山城である竜王山城がひかえています。今回の調査で見つかった平安時代の集落跡は、中世以前から、この地域の中心となる場所であったことを示しているのかもしれませんが。（森本直人）



平安時代の掘立柱建物

くわやまみなみ  
桑山南古墳群

平成30年1月から、一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴う発掘調査が始まりました。調査対象となる遺跡は数多くありますが、本年度は桑山南古墳群から着手しています。この周辺には、170基を超える古墳から構成される著名な佐良山古墳群が分布しており、桑山南古墳群もその一部に含まれます。

桑山南古墳群は計4基の古墳からなり、いずれも6世紀から7世紀にかけて築かれた円墳と考えられます。本年度は1号墳の周辺及び4号墳の調査



調査風景

を行いました。1号墳周辺では、古墳の副葬品と考えられる須恵器の破片などが多数出土しました。4号墳は大部分が道路予定地外にあるため、一部のみが調査対象となり、端部の確認にとどまりました。埋葬施設などは確認できていません。他の古墳は次年度以降の調査になりますが、そのうち1号墳と3号墳は横穴式石室の天井石などが露出しています。2号墳は頂部に石材が見られ埋葬施設の一部の可能性があります、詳細はまだ分かりません。

桑山南古墳群の南約60mには細畝古墳群（3基）、北約200mには桑山古墳群（4基）があり、次年度以降、順次調査を進めていく予定です。（尾上元規）

県道馬屋瀬戸線道路改築に伴い、平成30年1月から3月まで朱千駄古墳の発掘調査を行いました。調査地は墳丘の北側にあたる場所です。この古墳は、古墳時代中期後葉（約1,550年前）に築かれた全長85mの前方後円墳です。後円部中央からは、かつて兵庫県高砂市で産出される<sup>たつやまいし</sup>竜山石で作られた長持形石棺が掘り出され、中から古墳名の由来となった大量の朱、銅鏡、玉類、刀剣類の副葬品が出土しました。なお、この石棺は現在、県立博物館玄関前に展示されています。

今回の調査では、山裾を掘削した周濠状の落ち込みを確認することができ、後世の土取りによって不明瞭であった古墳の形状を復元する手掛かりを得ました。また、この落ち込みからは、円筒埴輪や朝顔形埴輪などの破片がまとまって出土しました。（澤山孝之）



調査風景



埴輪の出土状況

百間川は岡山城下を旭川の洪水から守るために、江戸時代に造られた放水路です。今回の調査地点である一の荒手は、旭川と百間川を分ける堤（背割堤）の一部を切り下げて越流部とし、その上流側と下流側には背割堤の端部を保護する巻石が構築されています。ここから旭川の洪水を百間川へと放流させます。これまでの調査で、幾度もの洪水によって一の荒手や背割堤などの堤が破壊され、その度に補修を繰り返してきたことが分かっています。さらに、今回の調査で知り得た洪水の威力は、前面に積んだ石垣を崩壊させ、越流部を<sup>えぐ</sup>抉るほどのものでした。その洪水によって運ばれた土砂の堆積は80cmもの厚さになります。また、洪水砂の上に新たに土を盛って築いた堤も、やはり洪水によって壊されたようで、近代以降に積み直した石垣で堤を強固にしていました。涙ぐましい努力の結果ともいえる繰り返された補修の痕跡は、百間川の防災機能についての期待を物語っています。

今回の調査で、平成26年度から断続的に行ってきた百間川分流部の改修工事に伴う発掘調査は最後となります。防災のため記録保存とせざるをえなかった箇所もありますが、保存可能な箇所は残されるはこびとなりました。百間川は治水の歴史を今に伝える土木遺産であり、また、岡山市街を洪水から守る現役の防災施設です。（團 奈歩）



調査風景

# 津島遺跡文化財講座「住まいの考古学」

県立博物館講堂において「住まいの考古学」と題して全3回の講義を行いました。私たちの日常生活の場である住まいを題材にし、そのありようや移り変わりなどを考古学的な視点から解説しました。

## 住まいの考古学 第1回 9月30日（土）

講義1「土葺きと草葺き」 総括主任 米田 克彦

縄文時代以降、約9,000年間一般的な住まいとして利用されてきた竪穴住居について、考古学的な調査や研究の方法、その構造を詳しく解説しました。また竪穴住居を復元する際には、自然災害により被災した住居の調査例や、銅鏡に描かれた建物の絵などを参考に行っていることを示しました。

講義2「囲炉裏とカマド」 主任 松尾 佳子

縄文時代より竪穴住居内に設置された炉は、調理や暖房・照明などといった多くの機能を有しています。対して、古墳時代中期以降、住居内に付設されたカマドは、調理という機能に特化しています。カマドの出現により生活様式に大きな変革が起こったと考えられます。

## 住まいの考古学 第2回 11月25日（土）

講義1「倉と貯蔵穴」 主 幹 團 奈歩

弥生時代から古代にかけての米を保管する施設について、その形態や管理主体の変遷を解説しました。ムラで共同管理し、地下式の貯蔵穴の使用もみられる弥生時代から、古墳時代の支配者層の管理と地上式の高床倉庫での保管を経て、古代には米を税として納める倉が規格化されます。

講義2「井戸と水路」 主任 河合 忍

弥生時代には、水稻農耕とともに水路（溝）や井戸が朝鮮半島から伝わりました。水路は、その設営や維持管理に共同作業が必要な上、土地を区画する機能も果たしたことから、当時の社会に大きな影響を及ぼしました。一方、井戸には造られる時期や場所に偏りがあり、出土遺物にも共通性が見られることから、農耕のまつりに関わるものが多いと考えます。

## 住まいの考古学 第3回 2月24日（土）

講義1「屋敷と建物」 課 長 亀山 行雄

住まいの周りを溝や柵で囲い込むことは、古墳時代以降に行われたようで、首長居館にはじまるこうした傾向は一般集落にも広がり、鎌倉時代には堀をめぐらせる屋敷が現れました。室町時代になると表・奥の観念も急速に普及し、やがて近世民家の誕生を見ることとなります。

講義2「古代の住まいを復元する」 総括副参事 金田 善敬

近年、各地の史跡公園で昔の建物が復元されていますが、本講座最後の講義では、津島遺跡に復元されている竪穴住居やシンボルモニュメントの事例をあげ、史跡公園に建物を復元する方法について説明しました。復元建物には、単に昔の建物を再現するだけでなく、活用のための意図や工夫が込められていることを紹介しました。



会場の様子



史跡津島遺跡のシンボルモニュメント

## 講演会「王墓から古墳へー倭人と東アジア世界ー」

平成30年1月20日(土)、岡山県生涯学習センターを会場に、九州国立博物館の河野一隆さんと大阪市立大学の岸本直文さんを講師にお迎えして講演会を開催しました。今回のテーマは、弥生時代から古墳時代へと移り変わる激動の時代を、東アジア世界との関わりから見直そうというものです。

河野さんは、王墓を「質量ともに隔絶して厚葬された埋葬方法の総称」と規定した上で、「神聖王権」と「威信財経済」が王墓を生み出す社会の前提であることを指摘されました。そして、この威信財経済の伝播に、「海の道」が重要な役割を果たしたことを強調されました。

岸本さんは、邪馬台国(ヤマト国)を1世紀に形成される畿内圏と断じ、2世紀後半には鉄素材や中国製文物の安定入手という共通利害で結ばれた九州以東の社会の中で優位性を確立し、本拠の纏向遺跡やヤマト国王墓の纏向石塚古墳を築いたと想定します。そして、ナ国・イト国を統制下においたヤマト国は、倭国乱の休戦合意として卑弥呼を共立し、その死に際して初代倭国王墓(箸墓古墳)を造営、この倭国王墓を規範とした前方後円墳の共有システムの普及は倭国の拡大を意味すると論じられました。(亀山行雄)



河野一隆さん



岸本直文さん

## 企画展・特別展

平成29年4月21日(金)から10月9日(月)まで、企画展1として「遺跡を掘る」と題した展示を行いました。これは、発掘調査に使用する道具や機材などを展示して、その作業手順を分かりやすく解説したものです。10月11日(水)からは、朝鮮半島から飛来した鬼(温羅)を吉備津彦が退治したという伝説にちなんで、半島系土器や鉄鋌(鉄の地金)・ミニチュア鉄器といった渡来人にかかわる出土品を紹介する企画展2「温羅伝説と渡来人」を、平成30年4月15日(日)まで開催しています。

また、6月6日(火)から10月9日(月)には、備前市を含む6市町の文化財で構成された「きっと恋する六古窯～日本生まれ日本育ちのやきもの産地～」の日本遺産認定を記念して、県内へ運ばれてきた国産陶器や輸入陶磁器を集めた特別展示1「中世を旅する焼きもの」を開催しました。さらに、10月11日(水)から12月26日(火)には、寄贈を受けた故西岡憲一郎さんの収集品を紹介する特別展示2「西岡コレクション」を行いました。倉敷市上水島遺跡群の旧石器や同中津貝塚の石棒、同亀山窯跡群の陶製瓦当范、浅口市占見廃寺の軒瓦など、興味深い資料が数多く含まれています。

(亀山行雄)



「遺跡を掘る」の展示



「西岡コレクション」の展示

## ふるさとの山城探訪

12月9日（土）、山城に登りながら城の構造や歴史について学ぶ「ふるさとの山城探訪」を開催しました。今回は、天空の城として名高い高梁市の国史跡備中松山城跡を訪ねました。ここは、戦国時代に毛利氏と三村氏が熾烈な戦いを繰り広げた、いわゆる「備中兵乱」の舞台としても有名ですが、中世の山城の一画が近世城郭として整備された全国的にも珍しい城でもあります。

県内外から集まった参加者約30名は、古代吉備文化財センターの職員から説明を受けながら熱心に城跡を見学しました。通常の観光ルートとは異なり城の背後から、発掘調査が進められていた大池跡や、壮絶な攻防が繰り広げられた戦国時代の砦跡（大松山城跡、天神の丸跡、相畑城戸跡）など、普段は訪れる機会の少ないこの城の見どころをたどりましました。そして最後には日本で最も高い場所に現存する江戸時代の天守や二重櫓も見学しました。

寒さの厳しい1日でしたが、参加者の皆さんは遠い昔に思いをはせているようでした。（金田善敬）



攻防が繰り広げられた天神の丸跡



重要文化財の天守を見学する参加者

## 中世城館跡総合調査

5年目を迎えた今年度は、美作の中央部にあたる津山市・鏡野町と、備中南部の矢掛町・総社市に所在する228か所の城館跡を調査対象としました。美作は山陰と山陽を結ぶ交通の要衝で、南北朝時代には播磨（兵庫県）の赤松氏、伯耆（鳥取県）の山名氏、戦国時代には出雲（島根県）の尼子氏、安芸（広島県）の毛利氏、備中の三村氏、備前の浦上・宇喜多氏といった諸勢力に攻め込まれ、たびたび戦場となりました。津山市の岩屋城跡とそれを取り囲む付城群跡、同市医王山城跡や鏡野町柵形城跡などは、毛利氏と宇喜多氏との激しい攻防の様子を伝えています。備中では、天正2～3（1574～75）年、織田氏と結んだ三村氏の拠る高梁市備中松山城やその一族の諸城が毛利氏に次々と攻め落とされる備中兵乱が起こり、猿掛城跡（矢掛町・倉敷市）や鬼身城跡（総社市）などはその舞台となりました。

今回の調査では、こうした城跡の縄張り図を作成したほか、これらに関わる文献史料や地名も調べました。また、昨年度の調査成果を紹介したパンフレット「攻略！おかやまの中世城館 第四巻（美作国西部編）」を刊行しました。

来年度は、備中北部の新見市・高梁市と南部の浅口市・倉敷市・早島町について調査を行う予定です。（物部茂樹）



岩屋城跡の曲輪群



猿掛城跡の土塁

## 文化財センターの仕事～出土品の展示公開～

文化財センターでは、県内に残る遺跡の確認や記録保存のための発掘調査事業とともに、その成果を広く紹介する公開活用事業にも積極的に取り組んでいます。中でも、本館1階にある展示室では、30年余にわたる発掘調査で得られた県内各地の出土品の一部を、常設展示として年間を通して（年末年始、臨時休館を除く）一般に公開しています。このほか、年に数回テーマを決めて、企画展などを行っています。今回は、この企画展にかかわる仕事の一部を紹介します。

### 企画を立てる

展示にあたっては、「温羅伝説と渡来人」のようにこの地域の歴史に関わるものや、「謎のうつわ-手焙り形土器-」といった興味深い出土品を紹介する展示など、一般の方々に親しんでいただけるような企画を考えます。

また、センターの仕事を理解していただくため、発掘調査の進め方や出土品から様々な情報を読み取る方法を紹介する「遺跡を掘る」、「土器を読む」なども企画しています。こうした展示は、県立博物館のように文化財に関わる機関やその関連行事などと連携して実施することもあります。

### 展示品を準備する

約5万箱にもものぼる出土品の中から、企画に沿った展示品を選びます。選択の基準は、展示の意図を的確に伝えるものであることはもちろんですが、保存状態がよく長期の展示に耐えることが絶対条件となります。このため、センターの収蔵品に適切な出土品がない場合は、市町村教育委員会等から借用することもあります。

また、展示内容を理解していただくために、出土品の解説や出土場所などの写真パネルなどを作成します。解説は、観覧者が読みやすいよう字体や字数に気を配るほか、専門用語や難しい表現を少なくして平易な言葉づかいを心掛けています。

### 展示を行う

展示では、観覧者の目線にあわせて写真や解説パネルを配置したり、展示の意図を伝えるため重要な出土品を強調するように照明や展示の仕方を工夫しています。また、展示台の色や高さを変えるなどして、展示が単調にならないよう配慮しています。

企画展や特別展の開催は、報道機関を通じて広報を行うほか、ポスターの掲示やセンターの刊行物（図書館や公民館、文化財関連機関などに配布）、ホームページなどでもお知らせしています。

若葉の萌えいずる季節、センターの近くへお越しの際は、ぜひご覧ください。  
(河合 忍)



展示の様子



展示パネルの作成



企画展示のポスター

## ◆ 備中南部の大規模集落

足守川下流域平野に所在する上東遺跡は、岡山県を代表する弥生時代集落遺跡の一つです。長期にわたる遺跡ですが、盛期となるのは弥生時代後期から古墳時代前期にかけてです。

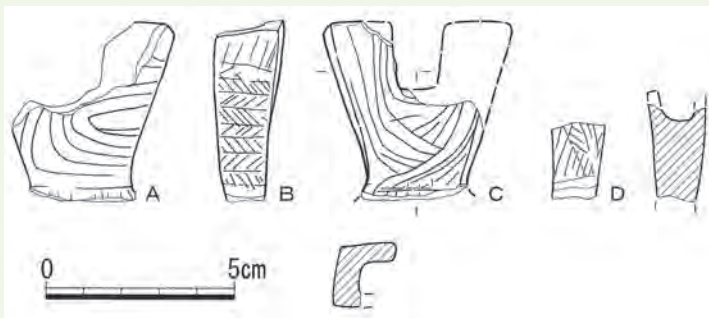
良好な土器資料が採集され、この地域の弥生時代後期の土器が上東式と名付けられたことも、この遺跡を著名なものとした理由

ですが、それにとどまらず、弥生時代の吉備を物語る豊富な資料が出土したことで知られています。

竪穴住居や井戸、製塩炉といった遺構、多量の土器資料がありますが、ここでは小さな土器片を紹介します。山陽新幹線建設に伴う調査で、後期前半の堆積から出土しました。下端には本体からはずれた形跡があり、突起のようなものと考えられます。通常の土器とは異なる特殊な形状で、木器を模倣した土器の一部と考えています。注目されるのは四つの面に刻まれた文様です。C面とD面には平行の線で形成された帯が斜めに交差する文様があり、A面にはそうした帯が大きくカーブするように描かれています。特殊器台や楯築遺跡弧帯文石の弧帯文がよく知られていますが、この資料はそれらよりも古く、また、渦巻くような表現がありません。成立した頃の弧帯文がどのようなものであったかを示す、重要な資料です。

さて、この遺跡で注目される遺構として、波止場状遺構があります。大きな川の中に盛り土で築かれた巨大構造物です。ここからは大量の土器とともに、9606個という大量の桃核（桃の種）が出土したことを所報56号に記しましたが、潮汐の影響を受ける状態で桃核が一定の範囲にとどまって堆積するのでしょうか。私は、川岸からのびるこの遺構は突堤<sup>せき</sup>のようなものではなく、巨大な堰ではないかと考えています。

上東遺跡は、古代吉備の解明に際して、研究の余地が多分にある遺跡です。 (宇垣匡雅)



弧帯文が刻まれた土器



波止場状遺構



編集・発行

## 岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-0136 岡山市北区西花尻 1325-3

TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142

<http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>

- 交通案内 JR山陽本線庭瀬駅下車徒歩 40分  
JR桃太郎線吉備津駅下車徒歩 25分
- 業務時間 AM8:30 ~ PM5:15
- 休業日 土・日曜日及び祝日、年末・年始
- 展示室の開館 AM9:00 ~ PM5:00

年末・年始を除き、土・日・祝日も開館しています。  
ただし、臨時に休館することがあります。